

バンクーバー航海記(1798)にみる太平洋の人々

石倉和佳

1. はじめに

1798年、ジョージ・バンクーバー (George Vancouver, 1757-1798) の航海記 (*A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean*, 3 vols. 1798; 以下、『バンクーバー航海記』もしくは『航海記』とする) が出版された。バンクーバーは出版の直前に死去し読者の反応を知ることはなかったが、この『航海記』はイギリス海軍のアメリカ北西部探検の公式記録として関心を集め、1800年までの間に多くの書評誌に取り上げられ紹介された。当時はナポレオン戦争へと突入する時代であり、イギリスでは18世紀的なブルジョア市民文化が中産階級を中心とした大衆文化へと変化する途上にあった。18世紀後半に軌道にのった産業革命と並行して都市部の人口は急速に拡大していた。同じ1798年に T. R. マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) が『人口論』 (*An Essay on the Principle of Population* 初版) を匿名で出版している¹。マルサスは1803年、大幅に改訂された『人口論』第2版を出版するが、彼は『バンクーバー航海記』に記載されたアメリカ北西沿岸部の人々についての記述を人口抑制についての事例として利用している。

本論は『バンクーバー航海記』の出版事情を概観し、彼が残したアメリカ大陸北西沿岸の人々についての記述を考察する。これまで広く読まれることが少なかった、この『航海記』に描かれた太平洋諸島およびアメリカ北西部沿岸に居住していた人々の記録の現代的意義を考えたい。マルサスの『人口論』に現れた『バンクーバー航海記』への言及はこの航海記の一つの読解であるが、同時代の人々にことよっての『航海記』理解の限界も示している。本論では『バンクーバー航海記』がどのように読まれたか、当時の書評やマルサスの視点も入れて考察する。

2. 『バンクーバー航海記』の出版とその受容: 1798年から1803年

バンクーバーが4年半に及ぶ航海を終えてイギリスに戻ってきたのは1795年であ

る。航海の終盤から目に見えて悪化していた彼の健康状態は、イギリスに戻ってから回復することなく、しばらくするとほとんど人前に出なくなってしまう。彼の調査隊の関係者によるスキャンダルめいた彼への批判や中傷が、悪化する健康状態と相まって『航海記』の完成を遅らせたと考えられる²。帰国後の翌年には出版する予定であったようであるが、完成まで至らずに1798年の5月12日に死去した。最後に残った航海の最終部分の編集と出版の業務は、兄のジョン(John Vancouver, 1756?-1829)が行った。『バンクーバー航海記』の正確な出版年月日は分からない。おそらく1798年の8月か9月である。この本にはいくつかの装丁の種類があり、国王に進呈されたものは特上の皮装丁が施されたものであった。通常の装丁版は3巻本で制作され、地図は別冊で付けられた³。

奇妙なことに翌1799年には、『バンクーバー航海記』の原稿が他の出版者に回され、海賊版と思われるダイジェスト版が他の2種の航海記の抄出と一緒に編集され出版されている⁴。刊行以前の段階でも、版下の作成が完了した部分については、元原稿は必要なかったかもしれない。現在バンクーバーの自筆原稿が一切残されていない理由は、出版の前から原稿を使いまわし海賊版を作ろうとする出版者が存在したからだということだろうか。またこの本に付けられた地図の版下は、出版からしばらくたってすべて盗まれてしまった⁵。バンクーバーが残した現在のカナダ、アラスカ西岸の地図は当時として最も正確なものであったが、ラッコなどの毛皮の宝庫であったこの地域の利権をめぐる、地図の取り合いのようなことも起こっていた可能性がある。当時はカナダ沿岸の毛皮貿易を巡って、ハドソン湾会社(Hudson Bay Company)と北西会社(North West Company)がしのぎを削っていた時期であったからである⁶。

1798年から1800年にかけて出版された『バンクーバー航海記』の書評は、現在確認できるものだけでも10種以上ある⁷。本論では書評の詳細には立ち入らないが、全体的な傾向としては、イギリス海軍の太平洋調査としてその意義を称賛することを主眼としたもの、北西航路の存在が確認されなかったことに対して様々な意見を述べるものがあり、内容的には航路を説明し引用を行わない書評もあれば、引用がほぼ半分以上を占めており、実質的に『航海記』の抄出版になっているものもある。海賊版が作られているのも、書評の文面のほとんどが引用といったものが現れるのも、書籍を買うことはできないが中身を知りたいという人々の興味を満たしたという面もあるだ

ろう。イギリス海軍が派遣した北西航路調査というバンクーバーの海洋探検の『航海記』には、このように一定の評価と関心が示されている。1801年には第2版として、6巻本に編集され再版された。

これまで『バンクーバー航海記』の書評が詳しく検討されたことはないようである。バンクーバーは出版の前に死去し、批判や中傷の対象となった出来事について自分から語る機会はなかった。この事も影響しているのか、これまで『バンクーバー航海記』の書評は少なく、反応は低かったとする見方が主流であった。1984年に出版された W.K.ラム(W. Kaye Lamb)による全編に注解が付けられた『バンクーバー航海記』現代版の序文においても、ラムが紹介しているのは2誌の書評と同船した船員の断片的な感想のみである。ラムはカナダ史、特にブリティッシュ・コロンビア(British Columbia)州の歴史の専門家である。バンクーバーはカナダの歴史にとって重要な人物であるが、彼の航海を研究する関心の射程が、イギリス海軍による調査探検への興味やカナダの歴史を明らかにするといった視点から大きく外れることがなかったというのが、これまでのバンクーバー研究の傾向と見てよい。また、『航海記』の書評は現在すべてインターネット上で閲覧できるが、このような研究環境になったのはここ最近のことである。書評がほとんど出なかった書物として長らく取り扱われてきた『バンクーバー航海記』であるが、当時主要な書評誌のほとんどが『航海記』を取り上げたとなれば同時代受容について再考されてもよいはずである。

また、著者の知る限り、バンクーバーの残したアメリカ原住民の記述について、十分な考察がなされているとはいいがたい⁸。そして上述した書評の中にも、バンクーバーの記述の意図を全く汲まずに誤読している部分が散見される。一つの例が『マンズリー・レビュー』(Monthly Review)に掲載された書評の次の引用である(For January, 1799, 9)。この箇所は、バンクーバー隊がタヒチを訪れた時、オットー王の即位と共に首長達の名前(固有名詞)に含まれる音を中心に多くの音声にタブーが布かれたということを伝えている。

オットーが王位についたとき、彼らの言語にはとても大きな変革がなされた。特にすべての首長の固有名においてである。しかしそれだけに限られたものではなく、会話に出てくる40か50以上の一般的な言葉にも起こったことであって、何であ

れ以前の表現とは少なからぬ類似性があった。この新しい言語をすべての住民が受け入れなければならなかった。というのもこれを無視したりばかにしたりするととても厳しく罰せられるからである。とはいえ以前の表現は彼らの記憶にあるので、私たちがうまく意思疎通するために、不興を買うことなく彼らと私たちとの会話には用いることが許されたと私は思う。しかしポミュレイはしばしば私が以前の表現を使うとそれを直した。それは間違っている、使うべきじゃない、と言って。

On Otoo's accession to the Maro, a very considerable alteration took place in their language, particularly in the proper names of all the chiefs, to which however it was not solely confined, but extended to no less than forty or fifty of the most common words which occur in conversation, and bearing not the least affinity whatever to the former expressions. This new language every inhabitant is under the necessity of adopting; as any negligence or contempt of it is punished with the greatest severity. Their former expressions were, however, retained in their recollection; and, for our better communication, were, I believe, permitted to be used in conversation with us, without incurring displeasure. Pomurrey however would frequently correct me on my accidentally using the former mode of expression, saying, I knew it was wrong, and ought not to practice it. (1792 January; Vancouver, vol.1, 427-428, underline mine)

これは、音声上のタブーともいえるもので、首長達の名前にある特定の音が他の音に入れ替わり、元の音を使うことが禁止されるということである。固有名だけではなく特定の単語の中の特定の音声も置き換わる。バンクーバーがタヒチを訪れたのはオットー(ポマレ2世, Pomare II)がタヒチ全土を治める王となったときであるが、このときこの音声言語のタブーの実践はもっとも強く行われていた時であったようである。タヒチのこうした音声上のタブーについては、クックの航海記でも言及されており、クック隊の一員であったバンクーバーにとってはすでになじみのある出来事であった⁹。そしてこの文章から分かることは、バンクーバーがタヒチの言語でコミュニケーションをとっているという事実である。古い音声を使うべきではないと注意しているのは前王のポミュレイ(ポマレ1世, Pomare I)である。彼はバンクーバーがクックと共にタヒチに滞在した際は有力な王の一人だった。現地言葉を覚えることは現地でのスムーズ

なコミュニケーションに必須であったと考えられる。

『マンスリー・レビュー』の筆者は、この部分を引用しながら、下線部分は引用しておらず、この現象がタヒチの王の即位と直接かかわるものであること、バンクーバーの話すタヒチの言葉をタヒチの友人が使ってはいけない等注意していることを消去している。そして、書評ではタヒチ王の即位と共に起こった言語変化は、ヨーロッパ人との交易の便宜のために、南洋の島々ではすぐに意思疎通できるようにヨーロッパ人に理解できるような発音で話す、という話にすり替わっている。書評で説明されているのは、いわゆるピジン語の発生段階のような言語であり、ヨーロッパ人の船が着く海岸の近くには、こうした会話術に上達した者たちが、通訳の代わりとなったと述べている¹⁰。しかしバンクーバーが報告していることは、タヒチの王の権威が言語音声に対するタブーを布いたことであり、ピジン語についてではない。そしてイギリスの船長がタヒチ語で現地の知人と会話していた、といった状況を書評は全く拾い上げない。これが『バンクーバー航海記』の内容を正確に理解できないからそうであるのか、それともイギリスに帰国後スキャンダルに巻き込まれたバンクーバーに対する悪意や中傷のようなものが隠されているのか、読者としてはそれさえも分からない。

こうした事例は他にも観察される。タヒチの王ポミュレイがバンクーバー隊に非常に沢山の布や食料を持ってきてくれたことに関するバンクーバーのコメントについての書評者の意見である¹¹。「甲板に来て、布や、豚や、鳥や、野菜をとでもたくさん持参してくれたのだが、それは私たちが分け与えることができるよりもたくさんあった」(“on coming on board, with cloth, hogs, fowls, and vegetables, in such abundance that we had now more than we could dispense with.”) とバンクーバーは述べる。この記述について、『アナリティカル・レビュー』(*Analytical Review*)では、バンクーバーの記述が英語の正確さを欠く例だとして間違った表現だと指摘している¹²。しかし『航海記』の本文を読むと、バンクーバーはポミュレイから贈呈された多くの食料に対する返礼品が十分あるかどうかを心配したが、幸い彼らが満足するような返礼の品々を選ぶことが出来た(分け与えることができた)という話であると分かる。バンクーバーは調査隊の買い付け人でもあり、物品を仕入れるために寄港するたびに、船員たちの食料や日用品などの他に、訪れた先の人々へのお礼の品を選んで手に入れていた。それは布やアクセサリーであったり、時には種子や山羊や羊であったりした。

これらの『航海記』の内容の誤読からは、書評者たちの太平洋の人々に対する偏見が根強いことがまず推測できる。ヨーロッパ文明が圧倒的に優位であり、原始的な暮らしをしている島々や海岸沿いの人々はヨーロッパ人の真似をしていると考え、バンクーバーが相手に敬意を十分に払うだけの返納品の価値に気を遣っていることなど頭に浮かばないようである。ナポレオンの脅威が間近に迫っている時期に、本国の人々から見れば原始的な暮らしをしていると思われた地球の裏側の人々の心に気遣う船長の姿は、ある種滑稽に映ったかもしれない。しかしそれにしても、これらの書評からは、クック隊の太平洋調査探検の第1回、第2回が成功裏に終わり、イギリス中がその成功に沸いた 1770 年代の社会の気分が、フランス革命が起こってナポレオンが台頭した 1800 年ごろになると愛国的なイギリス社会のうねりのなかでほとんど消え去っていたと推測できるのである。太平洋諸島や沿岸の人々との交流についての記述が『バンクーバー航海記』に描かれたとしても、イギリスが北西航路を得てヨーロッパ諸国に対する有利な地位を得ることができるとは決して語らない書物の中では、実益を伴わない情報として忘れられていったと見ることもできるだろう¹³。

ともあれ明らかであることといえば、バンクーバーがクックの第2回航海から船員として全行程に同船し、第3回航海では士官候補生として活動したこと、そしてこの経験によって彼がクック船長がハワイの現地の人々の暴動の中で殺されたことを、誰よりも教訓として心に刻むことになったに違いないことである。1791年にバンクーバーがアメリカ北西部沿岸の調査を命ぜられ、クック第3回航海での航路を踏襲してオーストラリア北部からニュージーランド、タヒチを抜けてハワイへと向かうことになったとき、彼が太平洋探検の成功のために現地の人々との平和的関係を維持することを、いかに実践するかに腐心したということは想像にかたくない。『バンクーバー航海記』では、調査隊が出会う人々について詳細に記述し、それらは時に貴重な民族の記録となって残っている。それらの記述においてバンクーバーによる現地の人々に対する観察は、集団としての彼らの在り様や交換の方法、行動様式などを細密に捉えようとしている。次には、彼が現地の人々との交流において、どのような行動規範を確立していたのか考えてみたい。

3. バンクーバーの太平洋航海における現地の人々との交流

バンクーバーが1791年からの太平洋航海で訪問した地域は、クックの第2回航海(1772-75) および第3回航海(1776-80)で訪問した地域と重なっている。クック航海で学んだ現地の人々のことを、最大限自身が船長として行う調査においても生かそうとしたことは当然であろう。バンクーバーが出航したとき、すでにクック第3回航海の指揮官たちの多くはこの世を去るか海軍士官を引退していた。クックが死んだ直後に船長となったチャールズ・クラーク(Charles Clerke, 1741-1779)もカムチャッカで死に、クラークの次に指揮を継いだジョン・ゴア(John Gore, c.1730-1790)もすでに物故していた。バンクーバーのように船長室に出入りしてクックの指揮下にいた者、南洋の島々の多くの首長と交流した経験を持つ者は、特にイギリス海軍の現役の中では少なくなっていた。クックの航海で航海士として重要な役割を果たしたウィリアム・ブライ(William Bligh, 1754-1817)は、1789年にパンノキ(breadfruits)を探すためにタヒチへ向かい、その後船員の反乱によって船を奪われ小舟で少数の士官たちとティモールへと逃げた。バウンティ号の反乱としてその後有名になるブライの航海から分かるように、船員の規律が緩むと船の秩序は乱れ、当初の目的を果たすことは難しくなる。この事件のあと、イギリス海軍による探検隊は必ず2艘の船団で航行することが決まり、バンクーバー調査隊においても主船ディスカバリー号(*Discovery*)に加えて補給船チャタム号(*Chatham*)が配置された。クック隊の教訓を生かすために、バンクーバーが航海の規律としてどのようなことを考えたか、それはクック隊で実践されたことを基に、経験から様々な修正を行い実行していくことだったと考えられる。

それではクック隊の規律とはどのようなものだったのか。船の航行に関わる基本的な操作や行動における訓練とは別に、クックは第1回航海のタヒチ上陸の前に、次の規律を船員たちに示したと伝わっている。

1. あらゆる正当な方法で、現地に住む人々と友情をはぐくむこと、そしてできる限りの想像しうる人道的なやり方でそれらの人々を取り扱うこと。
2. 食料や果物などのために現地の人々と交渉するために適切な者が指名される。他の乗組員は誰も許可なしにそれをするとはできない。
3. 岸に上がったすべての者は正確に自分の務めを果たすこと、そして自分の道具や武器に相応の注意を払うこと。

そして不注意でそれらの道具を失くした場合、給与から等価を支払わせ、場合によってはさらに懲罰が下される。4. 船の倉庫のどのようなものについても、それを横領し、売買取引し、もしくは売買取引を持ち掛けたりしたものについては同じ刑罰が与えられる。5. 食料以外、鉄製品はどのような物とも交換してはいけない。

1. To endeavour, by every fair means, to cultivate a friendship with the natives, and to treat them with all imaginable humanity. 2. A proper person or persons to be appointed to treat with the natives for provisions, fruits, &c. and no other person belonging to the ship to do so without leave. 3. Every person on shore to attend punctually to his duty, and to pay proper attention to his tools or arms; and if lost through negligence, to have the full value charged against his pay, with such farther punishment inflicted as occasion might require. 4. The same penalty to be inflicted on every one who should embezzle, trade with, or offer to trade with, any part of the ships stores; and, 5. No iron to be given in exchange for anything but provisions.¹⁴

ここに示されている規則は、すべてが相互に関連し補完し合う関係にある。南洋の島々やアメリカ北西部沿岸に当時居住していた現地の人々は、文字を持たない部族も多く文明という意味では遅れた状態にあると考えられた。その人々と友情で結ばれ何か起こったとしてもできる限り人道的な対処をしなければならないという第1の規則は、イギリス人の人道主義の普遍性を述べているものではない。これはイギリス海軍の船で探検を行う人々の安全と無事を保障する目的で、現地の人々に対して対等に付き合い交流することが、軽蔑や嫌悪の念をお互いに抱かずに平和的に物事を運ぶ要諦であるということを示している箇所と読める。イギリス海軍の編成した探検隊の生活は、船の中にすべての人々が居住しており、船の外は自分たちの社会的ルールが通じるかどうか分からないという環境である場合が多い。こうした状況において、想像しうる限り人道的なやり方つまり状況に応じて臨機応変に相手との軋轢を避けるようにふるまい相手を尊重することが重要なのである。

このように考えると、第2と第3の規則も関連しているのが分かる。陸地では油断せず行動すること、現地の人々からの食料や水の調達についても物々交換を原則に対等な形で責任をもって進めることが出来る者が担当するわけである。先に見た書

評に見られる誤解の数々は、こうした基本的な行動規範を理解していないところからも生まれると考えてよい。現地の人々と交渉する人を誰にするかは、船長が指名して決めるのであって、それは第1の規則を実践できる能力があるかどうかをまず見極められなければならないということだろう。許可なく現地の人々との交渉を禁じているのは、イギリスやヨーロッパの習慣や価値観だけでは分からない文化的振舞いに対応出来ない船員もいたからとも推測できる。第3の規則は、船から降りた者は必ず何らかの任務を与えられているはずであること、武器を持っている場合も多いことを示しており、第4の規則は船に積み込んだ食料や物品は計画的に利用するものであり、船の財産ともいうべきものである。積み荷の横領や他者に売り飛ばす行為は刑罰対象になるということである。バンクーバーは船の倉庫の管理を行い、先に述べたように買い付けも自分で行っていた。この航海の物資供給の重要な地点であったハワイ諸島は、クック隊の訪問以後イギリス海軍の船の寄港はなく、バンクーバーはハワイ諸島の政治的状況を注意深く偵察し、カメハメハが現在の実力者であると理解し、その後カメハメハとの信頼関係を築いた。彼の保護を得てバンクーバー隊はハワイでは厚遇され十分な補給と安全が保障されたが、同時に当時バンクーバーと交流した人々の多くが彼を長く覚えていたという事実に示されるように、バンクーバーも彼らにできる限りの援助をしたのである¹⁵。

クックの航海とバンクーバーとの大きな違いが、第5の規則から分かる。クックの場合、食料との交換であれば鉄器を渡してもよいと考えているのであるが、鉄製のメダルやアクセサリーの類以外、バンクーバーは物々交換における鉄器の供出を禁じた。第2回目の冬越しの際、ハワイの首長達が次々とやってきて、武器となる鉄器をねだったという記述があるが、バンクーバーはジョージ3世が銃や鉄器にはタブーを布いていると説明して彼らを納得させている¹⁶。1779年のハワイ滞在においてクック隊が多く鉄器を放出したことは知られている¹⁷。それが当時おそらく先鋭化していたと考えられるハワイの各部族の対立に火をつけることになったとすれば、バンクーバーとしては極力部族間の戦闘的気分を刺激することはしなかったと考えられる。

以上の考察と『航海記』における現地の人々の様々な記述から分かるように、バンクーバーは初めて出会う部族の場合、その人々がどのように自分たちに対して行動するか、彼らの顔つきや身につけているものはどのようなものか、住居はどこかなど

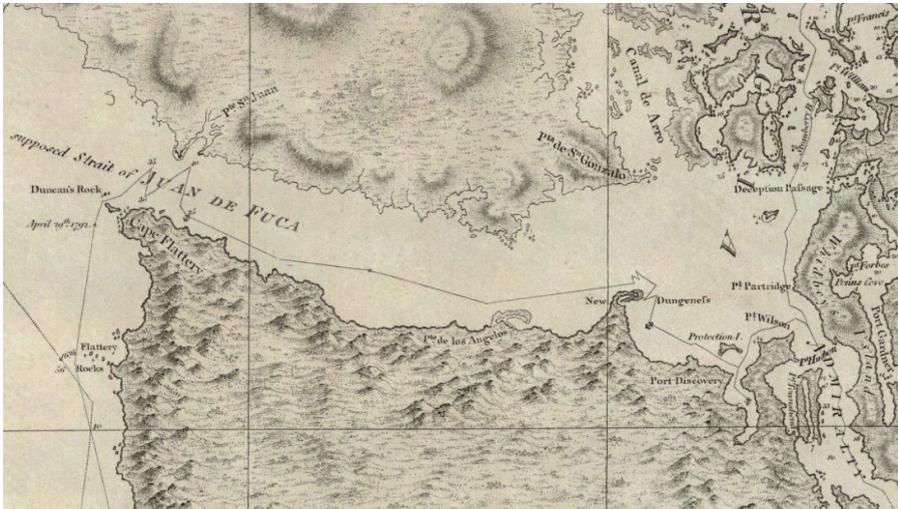
確認できるものを正確に把握しようとしている。一例を挙げると、現在のオレゴン州のオーフォード(Orford)の岬のあたりでカヌーに乗って出現したツツウニ・インディアン(Tututni Indian)の記述がある。彼らの「カヌーが船の方に漕いで来るのが見え、大いなる自信をもって、そして何も招かれていないのに、ただちに船腹に付いてきた」(“a canoe was seen paddling towards the ship; and with the greatest confidence, and without any sort of invitation, came immediately alongside.” Vancouver, vol.2, 490)のであるが、海岸の奥の岩場に風を避けて小さな小屋に住んでいるようであった。この部族の人々の態度は気持ちの良いもので、顔つきには一切獐猛なところが見られなかったという。布は殆ど身につけておらず、動物の皮(鹿、熊、きつね、カワウソなど)を纏っていた。彼らの体には森を歩いている間に付いた傷がみられた。中肉中背でやせ型であり、ヌートカ湾にいる人々とは異なる言葉を話した。ツツウニの人々と対してバンクーバーが困惑したことは、挨拶としての手土産を渡すといった気持ちで対応すると、相手は必要以上の物品を交換品として差し出すことだった。プレゼントだから受け取ってほしい、という要求が通らないのである。バンクーバーの記録は、好奇心と誠実さの入り混じったツツウニ・インディアンの様子を捉えているが、これはヨーロッパの言語で初めて記録されたものである¹⁸。バンクーバーの記述の一つの特徴として、対象となる部族や集団の行動原理が現れている第三者的視点からの観察を様々に積み上げて書くところがある。これらの点を考慮して、次にはマルサスの『人口論』第2版以降に見られる、『バンクーバー航海記』への言及と、その記述箇所全体に見られるバンクーバーの語りの特徴について考察したい。

4. アメリカ大陸北西海岸—消えた人々と墓所

マルサスは初版より大幅に加筆改変された『人口論』の第2版(1803)において、アメリカ大陸については主にウィリアム・ロバートソン(William Robertson, 1721-1793)の『アメリカ史』(*The History of America*, 1777)を引いているが、『バンクーバー航海記』はロバートソンの記述よりも新しいアメリカ大陸北西部の情報をもたらすものだった。彼は社会の発展状況を、当時一般的に考えられていたように狩猟(“hunting and gathering”)、放牧(“pastoralism”)、農耕(“agriculture”)、通商(“commerce”)の段階で考え、文明化されていない世界各地の社会における人口抑制と(“Of the Checks to

population in the less civilized parts of the world, and in past times”)、現代ヨーロッパ社会の人口抑制(“Of the Checks to Population in the different States of Modern Europe”)の事例をそれぞれ分けて考察した¹⁹。マルサスの分類によればアメリカ大陸北西沿岸に生活するアメリカン・インディアンの人々は、文明化されていない狩猟や採集生活の段階の人々であり、人類の進歩のもっとも初期の段階にいと捉えられている。マルサスにとってニュージーランドの人々もアメリカン・インディアンたちも野蛮で最も下等な生活をしている人々であることには変わりなく、これらの人々の文化差には考察が及んでいない。「未開」の人々は自然の脅威にもっともさらされている人々であり、自然災害や疫病、部族、民族間の争いなど一般的に人口抑制につながる事象に対して、文明が進んでいる国々よりも直接的に影響を受けると考えられている。

マルサスはアメリカ大陸において疫病が広まっており、人口減少の大きな原因になっていると述べている。その事例の一つとして、『バンクーバー航海記』の1792年5月の航行の際の記述に言及しているのである。ディスカバリー号はアメリカ合衆国オレゴン州とカナダのブリティッシュ・コロンビア州の国境に河口のあるコロンビア川



ディスカバリー号は上記の地図の中央を横切るファン・デ・フカ海峽を東へ航行し地図右下の Port Discovery に停泊し周辺の内海を測量した。David Rumsey Historical Map Collection, By George Vancouver, 1798 “The Coast of N.W. America” より

(Columbia River) 付近の沿岸を北上し、同じく二国間の国境にあるファン・デ・フカ海峡 (Strait of Juan de Fuca) を内陸に向かって東へと航行した。ファン・デ・フカ海峡を東へ行くと南東、および北へと広がる縁海であるサリッシュ海 (Salish Sea) が広がり、そこは現在では南部はシアトル、北部はバンクーバーという二つの巨大都市を抱える地域となっている。彼らの探検はイギリス海軍として初めて縁海を詳細に測量したという点で、画期的なものである。この時制作された正確な測量に基づく地図がなければ、シアトルとバンクーバーとしてその後発展する二つの港を、アメリカとカナダの二国で分けることを人々がイメージすることも難しかった。

バンクーバーはこの航海の間いくつかの部族の人々と遭遇し、食料と物品の交換も行ったが、彼らの人数はどの場合も少なく、船を停泊させたディスカバリー湾 (Port Discovery、現在の Discovery Bay) でもほとんど原住民の姿を見る事がなかった。彼はこの地域には放浪する部族も一定数いたと考えているが、このような少数の人口が常であったわけではなく、もっと多くの住民がこの地域には定住していた可能性は十分考えられると述べている (Cf. Vancouver, vol.2, 538)。内海で気候が比較的温暖で森林に囲まれた地域には、森林伐採や人々の集落の跡が点在していた。

この航行における見聞を綴ったバンクーバーの記述について、マルサスは天然痘によって引き起こされた人口減の事例として、次のように述べている。

[バンクーバー]はかつて存在したと考えられる数と同じ数の住民を目にすることなく、ニュー・ダンジネスから 150 マイル航行した。集落が打ち捨てられていることはしばしばあり、この地域の広がりで見られた点在する現地の人々をすべて収容できるほど大きなものであった。

From New Dungeness he traversed a hundred and fifty miles of the coast without seeing the same number of inhabitants. Deserted villages were frequent, each of which was large enough to contain all the scattered savages that had been observed in that extent of country. (Malthus, 1803, 31-32)

マルサスはバンクーバーの記述を詳細に読み、数ページにわたる記述を簡潔にまとめている。彼は人口抑制が極端に働いた疫病の影響の事例として次のように総

括するのである。

バンクーバー船長は様々な探索を行ったが、特にディスカバリー湾の近くでは、頭蓋骨、足、あばら、背骨、そして他の人間の体の部位の骨が多量に乱雑に散らかっているのに出会っている。そして生存しているインディアン(現地人)の人たちの体には戦争で受けた傷は見られず、恐れや疑念を示すものは特に見られなかったため、最もありうべきことは、この人口減少は伝染性の疫病によって引き起こされたに違いないということである。この海岸では天然痘がインディアンの人々にはよく見られ命にかかわるものと分かる。その消せない痕跡は多くの人々に観察され、何人かはその疫病のために目の一つを失っていた。

In the different excursions which he made, particularly about Port Discovery, the skulls, limbs, ribs, and back bones, or some other vestiges of the human body, were scattered promiscuously in great numbers ; and, as no warlike scars were observed on the bodies of the remaining Indians, and no particular signs of fear and suspicion, the most probable conjecture seems to be, that this depopulation must have been occasioned by pestilential disease. The small- pox appears to be common and fatal among the Indians on this coast. Its indelible marks were observed on many, and several had lost the sight of one eye from it. (Malthus, 1803, 31-32) ²⁰

マルサスのこの引用の目的は、ディスカバリー湾の周辺で起こったと推測される、天然痘による大量死を極端な人口減の事例として挙げることである。しかし天然痘が感染する病であるという点において、その流行は社会的なものとして考察されるべきであるが、マルサスの記述にはこの地域の人々の共同体の暮らしについて何一つ言及がない。これに比べて、マルサスが原典としたバンクーバーの記述は、以下に述べるようにマルサスを書くよりも複雑で多様な状況への考察が読み取れる。

バンクーバーは同船する海尉や船員たちの報告から、このように人骨が山のようにならされているところは周辺に多くあり、それはまるでディスカバリー湾の近隣が「この一帯の地域の国の人々の共同墓地」(“a general cemetery for the whole of the surrounding country” 538)ではないかという考えを抱かせるほどだという。このような

墓所があることは、少し前には現在よりもっと多くの人々が住んでいたことを推測させるものであった。彼は続いて人骨の様子を詳細に報告する。

非常に変わったやり方で配列されている人体もあった。2本かそれ以上の木々の間に、地面から12フィートくらいの高さでカヌーが吊るされ、そこには二人か三人の人骨が並べられていた。もっと大きなカヌーは森のはずれまで引いて行かれていたが、そこには四人から七人の人骨が入っており大きな木の板で覆われていた。

Some of the human bodies were found disposed of in a very singular manner. Canoes were suspended between two or more trees about twelve feet from the ground, in which were the skeletons of two or three persons; others of a larger size were hauled up into the outskirts of the woods, which contained from four to seven skeletons covered over with a broad plank. (May, 1792; Vancouver, vol.2, 538-539)

これらの人骨はただそこで死んだ者たちの朽ち果てたあとではなく、生き残った部族の誰かが「埋葬」しているものである。バンクーバーは残された部族の人々の行動をここで読み取り、彼の観察はこれらの「埋葬」の方法には様々なものがあり、生前の部族内での社会的地位を示唆するものがあることを発見する。

我々の見た2、3の骸骨は、カヌーの中に非常に注意深く置かれたもので、おそらく首長や、宗教的指導者や、特定の部族の長であった者たちであり、彼らに従った人々は首長達の記憶や亡骸にとっても強い畏敬の念を持ち続けている場合が多いと思われた。全ての原始的な部族の人々が弔いに荘厳さをもって臨むということを経験したことから得た一般的な理解から、彼らの死んだ人びとに気まぐれに何かを行うという侮辱を避けることを特に気遣った。高い木々に籠がぶら下げられているのを見つけたが、それぞれ小さな子供の骸骨が入っていた。それらの籠の幾つかには中に小さな四角の箱があり、白い練り物が入っていた。現地の人々が食べているのを見たものに似ており、おそらくサラネの根から作られたものである。それらの箱に一杯になっているのもあれば、ほとんど空っぽになって

いるのもあった。おそらくネズミか、リスか、鳥が食べたのだろう。

The few skeletons we saw so carefully deposited in the canoes, were probably the chiefs, priests, or leaders of particular tribes, whose followers most likely continue to possess the highest respect for their memory and remains: and the general knowledge I had obtained from experience of the regard which all savage nations pay to their funeral solemnities, made me particularly solicitous to prevent any indignity from being wantonly offered to their departed friends. Baskets were also found suspended on high trees, each containing the skeleton of a young child; in some of which were also small square boxes filled with a kind of white paste, resembling such as I had seen the natives eat, supposed to be made of the saranne root; some of these boxes were quite full, others were nearly empty, eaten probably by the mice, squirrels, or birds. (May, 1792; Vancouver, vol.2, 539, underline mine)

ここに死んだ子供への供物として出てくるサラネ(“the saranne root”)は、背丈の低い花をつける草の球根の部分であり、ペースト状にして食するものである。バンクーバーはスクーミッシュ(Squamish)の部族の人々がこの草の根を大勢で探して土を掘り起こしているところに遭遇している²¹。部族の中で位の高い家族の埋葬では、子供たちにもお供え物の箱が添えられ、苦勞して手に入れなければならないサラネの練り物が入れているのである。この埋葬が行われて、さほど時間が経っていないことが、お供え物への観察で分かるだろう。バンクーバーの筆は、事実を淡々と描いている中で、気まぐれな行いで死者を貶めることにならないように気遣う気持ちを綴るところからは、埋葬を執り行った人々の死者への畏敬の念を共有しているようにさえ読めてくる。彼の意識は、死者と生者とともに含んだ共同体の歴史とその行動原理へと向かっているのである。

バンクーバーはこれらの観察を行いながら、死者の多さの原因を疫病だけに帰していない。彼は、「これらの人骨がここに置かれた原因となるものについては我々は殆ど知りようがない。伝染性の病気なのかそれとも近年起こった戦いのせいなのかも」(“of the cause or causes that have operated to produce them we remained totally unacquainted; whether occasioned by epidemic disease, or recent wars” 540)と続けて考察す

る。バンクーバー隊があたりを散策している際に目にした現地の人々には、戦傷は見当たらないが、天然痘の痕跡が体に見られる者はいた。そして彼は次のように書く。

この人類におこった大破壊の真の原因が何なのかの結論を導き出すことは決して簡単なことではない。この探究を行うためにより時間があり、よりよい適性のある他の人々の調査を待つしかないのである。けれども次のように推量することが不合理なことであるとも言えないかもしれない。現在明らかになっている人口の減少が起こったのは、この地域の内陸部に住む人々が以前の居住地を放棄することを誘発され、直接的に商取引をして安く簡単に手に入れることが出来る便利さのために、海岸に近いところに移ってきたためではないか。商品として価値のある物品を、ヨーロッパ人やアメリカの市民がこの大陸の海岸まで持ってきており、現地の人々には大いに評価されて、多い少ないの程度はあっても皆手に入れているのである。

It is not ... very easy to draw any just conclusions on the true cause from which this havoc of the human race proceeded, which must remain for the investigation of others who may have more leisure, and a better opportunity, to direct such an inquiry: yet it may not be unreasonable to conjecture, that the present apparent depopulation may have arisen in some measure from the inhabitants of this interior part having been induced to quit their former abode, and to have moved nearer the exterior coast for the convenience of obtaining in the immediate mart, with more ease and at a cheaper rate, those valuable articles of commerce, that within these late years have been brought to the sea coasts of this continent by Europeans and the citizens of America, and which are in great estimation amongst these people, being possessed by all in a greater or less degree. (Vancouver, *Voyage*, vol.2, 540)

バンクーバーはここでこの章の筆を止めた。何故人口が減るのかについて彼は明確な理由を書いていないように見える。この地域の人々は短期間で移住する場合も多く、内陸部に住む現地の人々が沿岸部へ移ってきたと考えてもさして不思議なこと

ではない。しかしそれらの人々がなぜ沿岸部へ移動することを選んだのかは、様々な原因が考えられるだろう。現地の人々の側から見れば、ヨーロッパ人やアメリカに渡った白人たちがもたらす物品の魅力もあるだろう。現地の人々の人口が増えて、新しい居住地に移る必要のあるグループが出たとも考えられる。文明国と考えられる地域から来た人々—おそらくほとんどが私船による営利目的の人々—から見れば、ラッコの毛皮などの天然資源の捕獲のための船に必要な物資の補給が必要である場合もあれば、正確な地図のない地域の案内人が必要である場合もあるだろう。ディスカバリー湾からさほど遠くないヌートカ湾には、先にスペインが領有を主張する港とともに町が出来、そこにイギリスの船が入って占有を試みたために国際問題に発展しかけていた。それらの領有問題には現在のカナダからアラスカにかけての海の利権が絡んでいる。

バンクーバーの記述を総括すると、アメリカ大陸北西部のインディアンの人々は海に近づき壊滅的な被害を被ったということになる。その成り行きに影響を与えるものは、現地の人々の物資の少なさと、スペイン人やアメリカ人たちの持つ豊かな物資や武器、そして彼らの体にとりついた疫病をもたらす病原菌やウイルスということになるだろう。それらの要素は互いに関連し合い増幅する場合もあるはずである。小さな部族であればなおのこと、この三つのどれをとっても悪く働けば壊滅的なダメージとなりうる。バンクーバーはマルサスのようにすべてを天然痘などの病気のせいにはしていない。むしろ原因は複合的だと考えているように読める。白人の人々は現地の人々の思考回路を十分理解しようとしなかったことが多いこと、お互いの言語を十分に理解できないことからくるコミュニケーションの欠如が大きな軋轢になる場合もあること、現地の人々の思いが必ずしも表現され伝えられるわけではないこと、などを考慮すると、諍いのない共存関係を築くことの難しさが常にあるということだろう。クックがハワイで殺された後、イギリス海軍の人々は復讐の念に燃えてハワイの人々を襲撃し殺した。バンクーバーはその経緯のただ中で上官に従って行動したが、白人による襲撃事件がただそれだけであったとはとても考えられないのである²²。

5. おわりに

『バンクーバー旅行記』における太平洋の人々の記述はさらに詳細に読み解かれ

る必要があるだろう。彼の独特の語りを、一つの文学的な表現とも読むことができるからである。それは観察した事実を積み上げながら、見えない背後にある複雑な人と自然の関係を織り込もうとする語りである。探検隊の安全を確保するための現地の人々との友好的な関係への意思が、ある時に思惟へと深まり、見えないものを感じるように働く思考の形がそこにはある。それは実利的な行動それ自体を目的とする行為ではなく、自己よりも大きな視点から自らと他者を捉えようとする意欲でもある。そうした他者との現在性の共有の在り方を読み取る努力は、現在においても決して意味のないことではない。

(本稿は JSPS 科研費 21K00366 の助成によるものである。)

¹ マルサス『人口論』初版は急進派の文筆家の書籍を多く出版していたジョゼフ・ジョンソン (Joseph Johnson, 1738-1809) の出版社から出された。人口増のスピードに食料増産が追い付かないところからもたらされる社会問題への啓発とともに、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) などによる理想的政治思想に対する批判が中心となった構成であった。

² 帰国後、バンクーバーは航海に同行した人々の記録を『航海記』の執筆のために手元を集めたが、博物学者として同船したメンジーズ (Archibald Menzies, 1754-1842) の記録の受け渡しに王立協会会長のバンクス (Joseph Banks, 1743-1820) が介入し、それと同時に、船員として同船したトマス・ピット、キャメルフォード男爵 (Thomas Pitt, 2nd Baron Camelford, 1775-1804) から暴力的な船長としてそしりをうけ、決闘を申し込まれるといった事態に巻き込まれた。帰国後の彼はすぐに人々から忘れられた印象を持たれたようである。Bow, 213-226, および、Lamb, “Banks and Menzies” in Forbes (ed.), *From Maps to Metaphors*, 227-244 参照。

³ この書籍については、Forbes, 220-224 に詳細がある。

⁴ *New London Review*, “London Catalogue” for January, 1800 参照。ここには、3種の航海記から抄出した合本のエディンバラで刊行された書籍が紹介されており、最後のものがバンクーバーの航海記の原稿から印刷されたと記載されている (“..., the last in the original English MS. and soon after printed,” 76)。

⁵ Forbes, 243-244 参照。1801年刊行の第2版の序文 (“The Advertisement”) に事情が記載されている。

⁶ *New London Review* には、『航海記』の意義が次のように述べられている。“Admit that the expected discovery is impracticable, we learn from this abstract [the review in this journal] that Captain Vancouver’s geographical and astronomical observations are much more accurate than those of former voyagers, and that he has ascertained a method of rendering the British commerce in furs far more extensive and profitable than in any past period, 79.”バンクーバーの制作した地図が、今後

の毛皮貿易に非常に有益な道具を与えるということである。

⁷ 本論では書評の詳細には立ち入らないが、この時期に出版された『バンクーバー航海記』(1798)の書評として著者が確認できたものは以下のとおりである：*Critical Review* (Sep. 1798), *Monthly Eptome* (Sep. 1798), *Annual Register* (1798), *Monthly Review* (Jan. 1799), *New London Review* (Jan. 1799), *Analytical Review* (March, 1799), *European Magazine* (May, July, 1799), *Anti-Jacobin Review and Magazine* (April, 1799), *Naval Chronicle* (1799), *British Critic* (June, August, 1800)。当時出版されていた書評誌の多くは、政治的傾向や読者層の変化によって編集者の交代、廃刊、合併を繰り返した。これらの書評には値段が書かれているものがあり、1798年のものは3巻本で6ポンド6セントと記載されている。

⁸ Alison らの *The New World of Thomas Robert Malthus* は、マルサスの描いた世界各地の人口抑制事例について詳細に検討したものであるが、バンクーバーの『航海記』については十分な考察が見られない箇所もある。“Vancouver, as many before him, failed to note that earlier European contacts might have introduced smallpox and other contagious diseases” (132)と書かれているが、バンクーバーはヨーロッパ人と太平洋沿岸の人々との接触が古くからあることは十分に認知していた。そして現在のカナダ西北岸の Puget Sound 付近では、天然痘の患者について報告している (Vancouver, vol.2,528)。拙稿「18世紀末から19世紀初頭のハワイ諸島における病と死—ハワイはいかに語られたか」110-112 参照。

⁹ クックの第3回航海の際に報告されている。Vancouver, vol.1, 427 参照。

¹⁰ この記述は *Monthly Review*, 1799, 9 にある。

¹¹ このエピソードは Vancouver, vol.1, 398-399 に記述がある。

¹² *Analytical Review*, For March, 1799, 257. こうした言及の前に、“To the style of the work under our review we may, upon the whole, allow the merit of perspicuity and propriety. Nevertheless, we occasionally meet with such deviations from accuracy and purity of languages...” とある。作家でもない海軍の船長の文章だという臆見のせいとも取れる。書評者は、本文中で引用した部分の意味が分からず、彼らは十分に分け与えるほど多くを持っていた (“they had many with which they could have well dispensed” 257) という単に食物が多いから分け与えていると捉えている。

¹³ バンクーバー隊の探検の成果としては、ヌートカ湾を巡る領土問題をスペイン側と友好的に交渉し、現在のオレゴン州からカナダ、アラスカへ続く太平洋岸の精密な測量と地図作成を行い、彼の調査した湾岸から東へぬける北西航路はないことを証明したことがある。詳細は拙稿、「忘却と追憶：ジョージ・バンクーバーの太平洋航海」11-15 参照。

¹⁴ *Encyclopedia Britannica*, 1798, 3rd edition, vol.5, pp.390-391. “Cook”の項にある。

¹⁵ 拙稿「忘却と追憶：ジョージ・バンクーバーの太平洋航海」参照。

¹⁶ 拙稿「高貴な野蛮人はいない：ハワイの『王のマント』をめぐる消息」参照。

¹⁷ Gordon, 187 参照。

¹⁸ Vancouver, vol.2, 490-492 に記述がある。ツウツウニの人々は、その後ゴールドラッシュなどで押し寄せた白人の入植者と戦闘を繰り返し、居留地に移動させられることになった。Schwartz 参照。

¹⁹ Bashford, 11 および Malthus (2015) 参照。マルサスの『人口論』は現代まで多くの版や翻訳が出されているが、英語版のペンギンブックスの普及版に示されるように、初版を再録し第2版から登場した人口抑制の事例については殆ど省略するのが定番となっている。

²⁰ マルサスの『バンクーバー旅行記』への言及はほかにもあるが、多くは短い言及でこの部分が最も詳細である。なお、現代版の『人口論』のテキストは初版を採用することが多く、この第2版の内容についての研究は少ない。

²¹ Vancouver, vol.2, 544-545 参照。 "...nearly the whole of the inhabitants belonging to the village, which consisted of about eighty or an hundred men, women and children, were busily engaged like swine, rooting up this beautiful verdant meadow in quest of a species of wild onion, and two other roots, which in appearance and taste greatly resembled the saranne, particularly the largest; the size of the smallest did not much exceed a large pea: this Mr. Menzies considered to be a new genus. The collecting of these roots was most likely the object which attached them to this spot; they all seemed to gather them with much avidity, and to preserve them with great care, most probably for the purpose of making the paste..."

²² 1779年2月、クックがハワイの現地人に殺されたあと、不逞な態度を取る現地の人々から遺体が返却されない事態を受けて、キング海尉 (James King, 1750-1784) とともに行動していたバンクーバーは、クックの遺体を引き渡さないのなら明朝村を焼き討ち人々を殺すとハワイの人々に伝えに行った。それから数日は引き渡しに時間がかかり、村は焼かれて死傷者がでている。Cook, 554 参照。

<参考文献>

- Analytical Review (New Series,) or History of Literature, Domestic and Foreign.* Vol.1 From January to June 1799. London, 1799.
- Bashford, Alison and Joyce E. Chaplin. *The New Worlds of Thomas Robert Malthus.* Princeton: Princeton UP, 2016.
- Bown, Stephen R. *Madness, Betrayal, and the Lash: The Epic Voyage of Captain George Vancouver.* Vancouver: Douglas & McIntyre, 2008.
- Cook, James. *The Journals of Captain James Cook: the Voyage of the Resolution and Discovery, 1776-1780.* Ed. J. C. Beaglehole. Part One. Cambridge: Hakluyt Society, 1967.
- Encyclopedia Britannica, or A Dictionary of Arts, Sciences, and Miscellaneous Literature.* vol.5. Edinburgh, 1797.
- Fisher, Robin and Hugh Johnston (eds.). *From Maps to Metaphors: The Pacific World of George Vancouver.* Vancouver: UBC Press, 1993.
- Forbes, David W. (ed.). *Hawaiian National Bibliography 1780-1900.* Vol.1 Honolulu: University of Hawai'i Press, 1999.
- Gordon, George. *Vancouver: A Life, 1757-1798.* London: Philip Allan, 1930.
- Malthus, T. R. *An Essay on the Principle of Population: or, a View of Its Past and Present Effects on Human Happiness; with An Inquiry into our Prospects Respecting the Future Removal or Mitigation of the Evils which It Occasions.* A New Edition, Very Much Enlarged. London: Joseph Johnson, 1803.
- . *An Essay on the Principle of Population and Other Writings.* Intro. and Notes. Robert J. Mayhew. London: Penguin Books, 2015.
- Monthly Review; or Literary Journal Enlarged.* vol. 28. London, 1799
- New London Review; or Monthly Report of Authors and Books,* from January to June, 1800. vol.3. . London, 1800.
- Oxford Dictionary of National Biography.* Online edition. <https://www.oxforddnb.com/> 20200113
- Schwartz, E. A. *The Rogue River Indian War and Its Aftermath, 1850-1980.* Norman: University of Oklahoma Press, 1997.
- Vancouver, George. *The Voyage of George Vancouver 1791-1795.* Ed. W. Kaye Lamb. 4vols. London: Hakluyt Society, 1984.

石倉和佳 「記述することの空白:『ブリタニカ百科事典』の描くハワイ」『カルチュラル・グリーン』 1(2020):25-46.

石倉和佳 「18 世紀末から 19 世紀初頭のハワイ諸島における病と死ーハワイはいかに語られたか」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 24(2022):101-115.

石倉和佳 「高貴な野蛮人はいない:ハワイの『王のマント』をめぐる消息」『カルチュラル・グリーン』 3(2022):47-57.

石倉和佳 「忘却と追憶:ジョージ・バンクーバーの太平洋航海」『カルチュラル・グリーン』 2(2021):1-20.